

平成25年12月期 決算短信〔日本基準〕(連結)

平成26年2月13日  
東

上場会社名 日本コンセプト株式会社 上場取引所  
 コード番号 9386 URL <http://www.n-concept.co.jp/>  
 代表者 (役職名) 代表取締役社長 (氏名) 松元 孝義  
 問合せ先責任者 (役職名) 取締役管理部長 (氏名) 仁科 善生 (TEL) 03-3507-8812  
 定時株主総会開催予定日 平成26年3月27日 配当支払開始予定日 平成26年3月28日  
 有価証券報告書提出予定日 平成26年3月27日  
 決算補足説明資料作成の有無 : 無  
 決算説明会開催の有無 : 有 (アナリスト・機関投資家向け)

(百万円未満切捨て)

1. 平成25年12月期の連結業績(平成25年1月1日～平成25年12月31日)

(1) 連結経営成績 (%表示は対前期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
25年12月期	9,113	24.3	1,685	66.4	2,048	83.1	1,222	84.8
24年12月期	7,331	△1.9	1,012	△19.6	1,118	23.2	661	23.9

(注) 包括利益 25年12月期 1,340百万円(87.7%) 24年12月期 714百万円(39.0%)

	1株当たり 当期純利益	潜在株式調整後 1株当たり 当期純利益	自己資本 当期純利益率	総資産 経常利益率	売上高 営業利益率
	円 銭	円 銭	%	%	%
25年12月期	280.04	—	32.5	15.5	18.5
24年12月期	164.36	—	25.3	9.2	13.8

(参考) 持分法投資損益 25年12月期 ー百万円 24年12月期 ー百万円

(2) 連結財政状態

	総資産	純資産	自己資本比率	1株当たり純資産
	百万円	百万円	%	円 銭
25年12月期	13,651	4,371	32.0	1,001.17
24年12月期	12,696	3,161	24.9	724.18

(参考) 自己資本 25年12月期 4,371百万円 24年12月期 3,161百万円

(3) 連結キャッシュ・フローの状況

	営業活動による キャッシュ・フロー	投資活動による キャッシュ・フロー	財務活動による キャッシュ・フロー	現金及び現金同等物 期末残高
	百万円	百万円	百万円	百万円
25年12月期	1,425	△245	△717	1,956
24年12月期	493	△952	401	1,298

2. 配当の状況

	年間配当金					配当金総額 (合計)	配当性向 (連結)	純資産 配当率 (連結)
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計			
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	百万円	%	%
24年12月期	—	0.00	—	30.00	30.00	130	18.3	4.8
25年12月期	—	0.00	—	30.00	30.00	130	10.7	3.5
26年12月期(予想)	—	0.00	—	30.00	30.00		13.6	

3. 平成26年12月期の連結業績予想(平成26年1月1日～平成26年12月31日)

(%表示は、通期は対前期、四半期は対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益		1株当たり 当期純利益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
第2四半期(累計)	4,680	4.5	840	0.1	740	△32.0	450	△32.0	103.07
通期	9,590	5.2	1,770	5.0	1,560	△23.8	960	△21.5	219.88

※ 注記事項

(1) 期中における重要な子会社の異動（連結範囲の変更を伴う特定子会社の異動）： 無  
 新規 ー社（社名）、除外 ー社（社名）

(2) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示

- ① 会計基準等の改正に伴う会計方針の変更： 有
- ② ①以外の会計方針の変更： 無
- ③ 会計上の見積りの変更： 有
- ④ 修正再表示： 無

(注) 当連結会計年度より減価償却方法の変更を行っており、「会計方針の変更を会計上の見積りの変更と区別することが困難な場合」に該当しております。詳細は、添付資料21ページ「4. 連結財務諸表（5）連結財務諸表に関する注記事項（会計方針の変更）」をご覧ください。

(3) 発行済株式数（普通株式）

① 期末発行済株式数（自己株式を含む）	25年12月期	4,366,000株	24年12月期	4,366,000株
② 期末自己株式数	25年12月期	30株	24年12月期	ー株
③ 期中平均株式数	25年12月期	4,365,993株	24年12月期	4,025,426株

(参考) 個別業績の概要

1. 平成25年12月期の個別業績（平成25年1月1日～平成25年12月31日）

(1) 個別経営成績 (%表示は対前期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
25年12月期	9,021	24.4	1,604	68.4	1,987	89.7	1,182	95.3
24年12月期	7,254	△2.0	952	△18.3	1,047	27.9	605	31.7
	1株当たり 当期純利益		潜在株式調整後 1株当たり当期純利益					
	円 銭		円 銭					
25年12月期	270.80		ー					
24年12月期	150.41		ー					

(2) 個別財政状態

	総資産	純資産	自己資本比率	1株当たり純資産
	百万円	百万円	%	円 銭
25年12月期	13,003	3,794	29.2	869.07
24年12月期	12,091	2,742	22.7	628.16

(参考) 自己資本 25年12月期 3,794百万円 24年12月期 2,742百万円

2. 平成26年12月期の個別業績予想（平成26年1月1日～平成26年12月31日）

(%表示は、通期は対前期、四半期は対前年同四半期増減率)

	売上高		経常利益		当期純利益		1株当たり当期純利益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
第2四半期(累計)	4,630	ー	710	ー	440	ー	100.78
通 期	9,500	5.3	1,510	△24.0	930	△21.3	213.01

※ 監査手続の実施状況に関する表示

- ・この決算短信は、金融商品取引法に基づく監査手続の対象外であり、この決算短信の開示時点において、金融商品取引法に基づく財務諸表の監査手続は終了していません。

※ 業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

- ・本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。業績予想の前提となる条件及び業績予想のご利用にあたっての注意事項等については、添付資料2ページ「1. 経営成績（1）経営成績に関する分析」をご覧ください。
- ・当社は、平成26年2月26日に機関投資家及びアナリスト向けの決算説明会を開催する予定です。

## ○添付資料の目次

1. 経営成績・財政状態に関する分析 .....	2
(1) 経営成績に関する分析 .....	2
(2) 財政状態に関する分析 .....	2
(3) 利益配分に関する基本方針及び当期・次期の配当 .....	4
(4) 事業等のリスク .....	4
2. 企業集団の状況 .....	7
3. 経営方針 .....	9
(1) 会社の経営の基本方針 .....	9
(2) 目標とする経営指標 .....	9
(3) 中長期的な会社の経営戦略 .....	9
(4) 会社の対処すべき課題 .....	9
4. 連結財務諸表 .....	11
(1) 連結貸借対照表 .....	11
(2) 連結損益計算書及び連結包括利益計算書 .....	13
(3) 連結株主資本等変動計算書 .....	15
(4) 連結キャッシュ・フロー計算書 .....	17
(5) 連結財務諸表に関する注記事項 .....	19
(継続企業の前提に関する注記) .....	19
(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項) .....	19
(会計方針の変更) .....	21
(デリバティブ取引関係) .....	21
(セグメント情報等) .....	22
(1株当たり情報) .....	24
(重要な後発事象) .....	24
5. その他 .....	25
(1) 生産、受注及び販売の状況 .....	25

## 1. 経営成績・財政状態に関する分析

### (1) 経営成績に関する分析

#### ①当期の経営成績

当連結会計年度における我が国経済は、安倍政権による経済対策（アベノミクス）や日本銀行による大胆な金融緩和策等を契機として、円安、企業収益回復、株価上昇、個人消費・設備投資拡大と景気の好循環が波及する中で回復基調を鮮明にしました。

一方、世界に目を向けますと、米国は、住宅や家計債務などの構造調整が進展する一方で、シェール革命を背景として製造業復活の動きが強まるなど、世界経済の牽引役としての存在感を着実に回復しました。債務危機以降景気後退を余儀なくされた欧州もドイツの景気が持ち直すなど、落ち込みに歯止めがかかり、緩やかな回復の兆しを見せております。一方新興国においては、中国が7%台の経済安定成長への移行を進めるなど全体としてこれまでの経済成長の勢いに陰りがみられました。

このような状況のもと、当社グループにおきましては、円安による日系企業の価格競争力の向上や、アメリカの景気上昇、欧州経済の底入れなどを背景として、輸出が順調に拡大しました。輸入も、円安の進展はあったものの、国内景気回復を要因として、アジアや欧州などからの輸入を中心に増加しました。これらの結果、三国間貿易の取扱額は減少したものの、輸出入を合わせた当社全体の取扱高は順調に増加しました。

取扱高の拡大と円安の進展を受けて、当社グループの当連結会計年度の売上高は9,113百万円（前期比24.3%増）、営業利益は1,685百万円（前期比66.4%増）と大きく増加しました。加えて、決算期末時点の為替相場が1ドル＝105円39銭（前期比18円81銭の円安）となり、通貨オプション取引において370百万円（前期比26.0%減）のデリバティブ評価益を計上したことから、経常利益が2,048百万円（前期比83.1%増）となり、法人税等差引後の当期純利益は1,222百万円（前期比84.8%増）と大幅な増益となりました。

なお、370百万円のデリバティブ評価益（前期は500百万円の評価益）を計上するに至った主な要因は、期日の到来した通貨オプション取引が権利行使されたことによりデリバティブ債務が減少したうえ、為替相場が大幅に円安に変動したこと等により通貨オプション取引の時価評価がプラスに転じたことによるものです。

#### ②次期の見通し

平成26年の日本経済は、4月の消費税率5%から8%への引き上げに伴い、1-3月は消費税率引上前の駆け込み需要増、4-6月にはその反動減が見込まれますが、通年ベースでは政府による経済対策に加え、円安を背景とする輸出の拡大、企業収益改善による設備投資の回復などが下支えし、景気は年後半にかけて持ち直すとみられます。

一方、世界経済をみると、米国経済は、個人消費や設備投資の回復基調の持続から、堅調推移が見込まれます。欧州では、ドイツに続き、フランス等の景気も底入れし、欧州全体の経済成長率は、緩慢ながらも成長に転じるとみられます。新興国では、中国が安定成長への移行を目指すものの、アジア経済を中心として、全体としては欧米からの外需の持ち直しを受けて成長のペースが緩やかに加速すると見込まれます。

このような情勢の中、当社グループは、日系企業の輸出競争力回復に伴う輸取出扱の増大、平成24年設立の米国現地法人の本格稼働による輸出入・三国間取引の増大等に注力することで、海外取扱量を拡大して参ります。更に国内においては、平成25年に開設した中部支店や、増設した神戸支店の機能をフル活用することで、取引量を拡大して参ります。

これらの結果、当社グループの次期連結会計年度における業績見通しは、前提となる為替相場を1ドル98円00銭とした上で、売上高9,590百万円、営業利益1,770百万円、経常利益1,560百万円、当期純利益960百万円を予想しております。

### (2) 財政状態に関する分析

#### ①資産、負債及び純資産の状況

##### (イ) 資産

流動資産は、前連結会計年度末に比べ872百万円増加（33.6%増）し、3,471百万円となりました。現金及び預金が374百万円、売掛金が228百万円、その他が250百万円増加したことが主な要因です。

固定資産は、前連結会計年度末に比べ90百万円の増加（0.9%増）にとどまり、10,170百万円となりました。建物及び構築物（純額）が194百万円増加したものの、減価償却等によりタンクコンテナ（純額）が116百万円減少したことによりです。

この結果、総資産は、前連結会計年度末に比べ954百万円増加（7.5%増）し、13,651百万円となりました。

(ロ) 負債

流動負債は、前連結会計年度末に比べ614百万円増加（22.0%増）し、3,403百万円となりました。買掛金が130百万円、1年内返済予定の長期借入金が200百万円、未払法人税等が286百万円増加したことが主な要因です。

固定負債は、前連結会計年度末に比べ868百万円減少（12.9%減）し、5,876百万円となりました。社債が324百万円、長期借入金が321百万円、デリバティブ債務が238百万円減少したことが主な要因です。

(ハ) 純資産

純資産は、前連結会計年度末に比べ1,209百万円増加（38.2%増）し、4,371百万円となりました。これは主に、利益剰余金1,091百万円と為替換算調整勘定117百万円の増加によるものです。

②キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金という」）は、前連結会計年度末に比べて657百万円増加し、1,956百万円となりました。当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とこれに係る要因は次のとおりであります。

(イ) 営業活動によるキャッシュ・フロー

営業活動の結果得られた資金は、1,425百万円（前期は493百万円の収入）となりました。税金等調整前当期純利益1,992百万円、減価償却費685百万円、デリバティブ評価益370百万円、為替差益206百万円、及び法人税等の支払額550百万円が主な要因です。

(ロ) 投資活動によるキャッシュ・フロー

投資活動の結果使用した資金は、245百万円（前期は952百万円の使用）となりました。これは主に、有形固定資産の取得による支出607百万円、定期預金の純減少額354百万円によるものであります。

(ハ) 財務活動によるキャッシュ・フロー

財務活動の結果支出した資金は、717百万円（前期は401百万円の収入）となりました。これは主に、短期借入れ及び長期借入れによる収入1,830百万円に対し、短期借入金、長期借入金及びリース債務の返済並びに社債の償還による支出2,394百万円、配当金の支払額130百万円があったことによるものであります。

(参考) キャッシュ・フロー関連指標の推移

	平成24年12月期	平成25年12月期
自己資本比率 (%)	24.9	32.0
時価ベースの自己資本比率 (%)	27.5	68.4
キャッシュ・フロー対有利子負債比率 (年)	16.1	5.3
インタレスト・カバレッジ・レシオ (倍)	2.1	6.2

自己資本比率：自己資本／総資産

時価ベースの自己資本比率：株式時価総額／総資産

キャッシュ・フロー対有利子負債比率：有利子負債／キャッシュ・フロー

インタレスト・カバレッジ・レシオ：キャッシュ・フロー／利払い

(注1) いずれも連結ベースの財務数値により計算しています。

(注2) 株式時価総額は、期末株価終値×期末発行済株式数（自己株式控除後）により算出しております。

(注3) キャッシュ・フローは、連結キャッシュ・フロー計算書の営業活動によるキャッシュ・フローを利用しています。

(注4) 有利子負債は、連結貸借対照表に計上されている負債のうち利子を支払っている全ての負債を対象としています。また、利払いについては、連結キャッシュ・フロー計算書の利息の支払額を使用しております。

### (3) 利益配分に関する基本方針及び当期・次期の配当

当社グループは、株主の皆様への安定配当の維持を基本方針とし、利益の状況を基礎に事業環境、事業見通し、更には配当性向等の諸般の状況を総合的に勘案し、利益還元を決定することを基本としております。

一方で、現在当社グループは持続的な成長の途上にあり、業容の拡大と利益の増大を維持・継続するためには、内部留保による財務体質の改善と設備投資による事業への投資が不可欠であります。この観点に立ち、安定配当を維持しつつ、成長に向けた投資のための内部留保を積極的に行ない、これを事業投資に活用し企業価値を着実に向上させることで株主の皆様へ還元して行きたいと考えております。

なお、当期（平成25年12月期）の期末配当につきましては、普通配当として1株当たり30円を予定しております。

また、次期（平成26年12月期）の期末配当につきましては、上記の基本方針に基づき、当期と同額の1株当たり30円とさせていただきます予定であります。

### (4) 事業等のリスク

事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資家の皆様の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

当社グループでは、これらの事項に関わるリスクの存在を認識し分析したうえで、その発生を未然に防ぎ、且つ、万一発生した場合でも適切に対処し影響を最小にするよう努める所存であります。一方で、投資家の皆様による当社グループ株式に対する投資判断は、本項及び本項以外の諸記載事項と併せて慎重に検討したうえで行われる必要があると考えております。

また、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当社グループが事業を行うに当たり、予め現時点で想定し得る主要もしくは重大と思われる事象と、これに関わるリスクを述べたものであります。このほかにも発生し得る事象とリスクがある可能性があり、事前に投資家の皆様がこれらをご自身で想定の上で、当社グループ株式に対する投資判断を行う必要があると考えております。

#### ① 重大な事故等によるレピュテーションリスクの影響

当社グループは、液体の大量且つ遠隔輸送が可能な輸送容器であるISO標準規格のタンクコンテナを長期間繰り返し使うことで、環境に優しい液体輸送サービスを国の内外を問わず提供するインフラ型企業であります。従って「公共性、信頼性、国際性を備え、社会に誇りうる会社」たるべく、特に事故防止と環境汚染対策が経営の最重要事項であると認識しております。

この観点に立ち、設備の保守や更新、人材教育や社内規則の見直し等を通じた社内体制の改善に継続的に取り組んでおり、万一緊急事態が発生した場合には、迅速かつ適切に対処すべく会社の内外体制を整備しているほか、リスクの軽減を目的として損害に応じた付保等についても充実させております。

しかしながら、不測の事態、とくに危険物の漏洩事故や社会的に大きな影響を及ぼす可能性がある環境汚染に繋がる想定外の事態等におけるレピュテーションに関わる事象が発生した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態が大きな影響を受ける可能性があります。

#### ② 化学品等製造業界の市況変動や輸送需要の増減及び費用の変動等による影響

当社グループが取り組む国際複合一貫液体輸送事業においては、国の内外を問わず顧客を獲得することによって初めて安定的な営業収益の確保が可能となります。従って、世界の化学業界等の輸送需要の動向や海上運賃等の外部環境の大きな変化に伴い、輸送量及び単価、リース及びレンタル収入等が大きく変動する可能性があります。その結果、当社グループの経営成績及び財政状態が影響を受ける可能性があります。

#### ③ 外国為替相場の変動による影響

当社グループが営む国際物流事業においては、売上代金の回収や費用の支払いを米ドル建とするのが取引慣行とされており、タンクコンテナの購入代金やレンタル料の支払いも米ドル建で行います。また、海外の現地法人子会社は現地の通貨を使用しており、当社グループの業績は為替相場が変動する影響を受けております。また、当社には、リーマンショックの発生前に締結し、期日の到来していない通貨オプション取引が残っております。

この通貨オプション取引は、契約時の想定を超える水準まで円高が進んだ際には多額のデリバティブ評価損や為

替評価損を計上しましたが、為替相場が大幅な円安に転じた当連結会計年度におきましては、デリバティブ評価益と為替評価益を計上しております。今後につきましては、為替相場が再び円高に転じた場合にはデリバティブ評価損と為替評価損が発生し、当社グループの業績がマイナスの影響を受ける可能性があります。しかしながら、通貨オプション取引は平成27年度中に残高がゼロになるうえ、当社グループの収益力及び米ドル建の投資計画や経費支払いを勘案するとその影響は吸収可能な規模であると考えております。

その他、為替相場が変動することに伴い、当社の外貨建資産や海外連結子会社の外貨建の資産及び負債の邦貨換算額が変動することも、当社グループの業績に影響を与えています。

#### ④ 有利子負債について

当社グループは、更なる業容拡大を目指してタンクコンテナ及び国内・海外の物流洗浄拠点等に対する設備投資を継続しており、その設備投資資金の多くは金融機関からの借入金等の有利子負債に依存しております。

##### (イ) 依存度

当社グループの有利子負債依存度は、平成24年12月末の時点で62.7%、平成25年12月末の時点で55.7%となっております。当社グループは、タンクコンテナの取得資金を主として金融機関からの借入れにより調達して参りましたので、総資産残高に対する有利子負債残高の割合が高い水準で推移しております。今後もタンクコンテナの取得資金は、借入金、社債、リース等により調達していく方針であるため、当分の間は有利子負債依存度が相対的に高い水準で推移していくことが予想されます。

##### (ロ) 金融機関との関係

有利子負債による設備資金の調達は、特定の金融機関に偏ることなく複数の大手金融機関から行っており、現時点ではこれらの金融機関との関係が良好であることから必要資金の新規調達に懸念はございません。しかしながら、将来、経営成績の急激な悪化や社会環境及び金融情勢の大きな変動等、何らかの理由により金融機関との関係が悪化して資金調達に支障が生じた場合は、当社グループの事業展開に大きな制約を受ける可能性があります。

##### (ハ) 財務制限条項

当社グループは、主に金融機関からの借入れをもとに大型設備投資を実施しておりますが、当該借入契約のなかには財務制限条項が設けられているものがあります。金融機関とは持続的に円満な関係を築いておりますが、連結決算及び単体決算それぞれにおいて、財務制限条項のいずれかに該当することとなった際には、期限の利益を喪失する可能性があります。

##### (ニ) 金利変動リスク

将来の利息の支払額を予め確定するために固定金利で資金調達をすることを原則としておりますが、変動金利での資金調達をせざるを得ない場合には金利変動リスクにさらされる可能性があります。

## ⑤ 法的規制の強化による影響

当社グループが運行するタンクコンテナは、危険品の輸送に関する規則であるIMDGコード（注）及び消防法等や、関税に関するコンテナ条約等の国際条約及び関税法等の内外法規制による影響を受けております。今後各国において新たな条約や法令等による規制が行われた場合、当社グループの事業展開に制限が加えられたり、事業費用が増加することとなり、当社グループの経営成績及び財政状態が影響を受ける可能性があります。特に、タンクコンテナ洗浄時に発生する廃棄物を正しく処理しなかったことにより環境問題を発生させた場合、業務停止命令を含めた行政指導を受ける可能性があります。

なお、適用対象となる主要国内法令は下表に示すとおりです。

対象	法令等名	監督官庁	法的規制の内容
利用運送事業	貨物利用運送事業法	国土交通省	貨物利用運送事業の適正かつ合理的な運営を図り、もって利用者の利益の保護及びその利便の増進に寄与することを目的とした各種の規制が定められております。
タンクコンテナ	消防法	総務省	消防法における危険物該当品を国内で輸送する場合、移動式タンク貯蔵所として届出を行い許可を受けるよう定めております。
	コンテナに関する通関条約及び国際道路運送手帳による担保の下で行う貨物の国際運送に関する通関条約（TIR条約）の実施に伴う関税法等の特例に関する法律	財務省	免税コンテナを輸入した場合、その輸入の許可の日から2年以内に再び国際輸送に使用（再輸出）せねばならず、また一定の条件を満たさない限り、国際輸送以外の用途に使用してはならないと定められております。
タンクコンテナ洗浄	廃棄物の処理及び清掃に関する法律	環境省	洗浄時に発生する廃油、及び排水処理設備より排出される汚泥が産業廃棄物に該当し、その収集・運搬及び処理について定められております。
貨物の積替	消防法	総務省	消防法における危険物該当品の容器間の積み替え及び一時的留置を行う際は、予め許可を得た取扱所内において作業を行わなければならない旨、定められております。

（注）IMDGコード：International Maritime Dangerous Goods Code の略称で、特定の危険物に関する分類、及びそれら危険品を国際海上輸送する際の輸送容器、包装基準、積載方法、船積書類等についての基準を包括的に定めた国際的な規則。

## ⑥ 自然災害または政治的、社会的非常事態等による影響

当社グループの事業活動の範囲は、日本、東アジア、東南アジア、オセアニア、欧州、中東、北米、及びそれらの周辺地域に及んでおります。これらの地域においては、一部に政情不安定な地域も含まれていることから、政治的、社会的非常事態が発生した場合には、顧客へのサービスの提供が一時的もしくは長期にわたって滞る可能性があります。また、当社グループの物流洗浄拠点は主要な港湾に隣接したり、その周辺地域に立地しております。このため、自然災害等に対して法令に定められた防災対策を施してはおりますが、地震、津波、台風、洪水等の大規模な自然災害によっては、直接、間接に甚大な被害を受ける可能性があります。従って、各地域において通常の物流活動を妨げるような政治的、社会的非常事態や自然災害が発生した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態が影響を受ける可能性があります。

## ⑦ 事業規模の拡大に伴うリスクについて

当社グループは、現時点においてグローバルネットワークを持続的に拡張してゆくことを基本方針としており、今後、北米地域やアジア諸地域等に対してさらなる事業展開を進めて参ります。

海外においては、現地の法律や規制の突然の変更、産業基盤の脆弱性、人材の採用や確保の困難さ等、事業を行ううえで直接影響を受ける事業継続リスクに加え、テロ、戦争、その他の要因による社会的または政治的混乱等が発生するリスクが存在します。こうしたリスクが顕在化することにより、海外での事業活動に支障が生じ、当社グループの業績及び将来計画に影響を与える可能性があります。



## 2. 企業集団の状況

当グループは、当社及び連結子会社であるNIPPON CONCEPT SINGAPORE PTE. LTD.、NIPPON CONCEPT MALAYSIA SDN. BHD.、EURO-CONCEPT B.V.、NICHICON EUROPE B.V.、NICHICON UK LIMITED.、NIPPON CONCEPT AMERICA, LLC.の計7社で構成されております。

当社グループ各社の事業における位置付けは、次のとおりであります。

社名	事業内容
日本コンセプト株式会社(当社)	日本及び周辺地域における輸出入貨物取扱業、及び、グループ統括
NIPPON CONCEPT SINGAPORE PTE. LTD.	東南アジア、中国、インド、中東及びオセアニア地域における輸出入貨物取扱業、及び、地域統括
NIPPON CONCEPT MALAYSIA SDN. BHD.	東南アジア地域におけるタンクコンテナの洗浄、及びメンテナンス並びにマレーシアにおける輸出入貨物取扱業
EURO-CONCEPT B.V.	持株会社(欧州地域統括)
NICHICON EUROPE B.V.	欧州(除く英国)における輸出入貨物取扱業
NICHICON UK LIMITED.	英国における輸出入貨物取扱業
NIPPON CONCEPT AMERICA, LLC.	米州における輸出入貨物取扱業

当社グループの主な事業内容は、ISO標準規格の液体輸送容器であるタンクコンテナ(以下「タンクコンテナ」という)を利用した液体物流サービスの提供とタンクコンテナ自身のワンウェイリース(注)及びそれらに付随するサービスの提供であります。主な取引先には、大小の化学品メーカーや化学品等を扱う商社、及び食品会社等があります。これらの国内外の取引先の化学品、石油化学品、洗剤原料、インキ、香料、食品材料等の様々な液体貨物について、当社グループは、タンクコンテナを輸送容器として、アジアの諸地域はもとより欧米各国との間での液体物流サービスを提供しております。

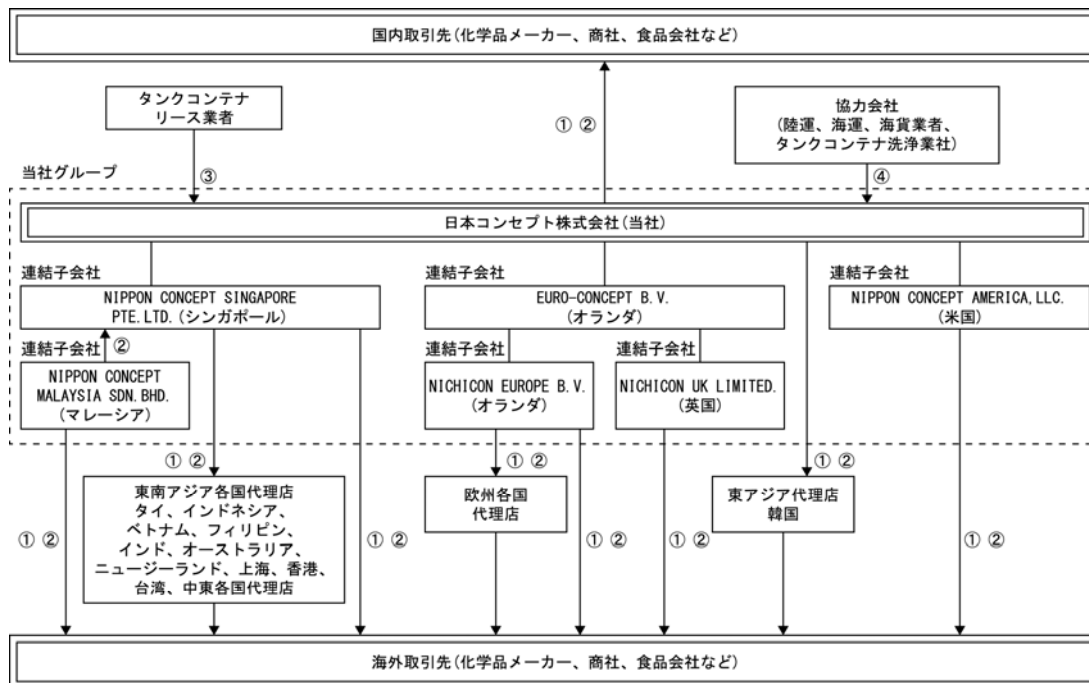
なお当社グループは、国際ネットワークを活用し、国内外の陸地輸送(鉄道/トラック)や、海上輸送(コンテナ船)等を外注することで、様々な外注先による輸送手段を組み合わせた国際複合一貫輸送を行っております。

タンクコンテナの強みは、ドラム缶やタンクローリー車に比べ大量輸送が可能であるうえ繰り返し使用することができ、また、コンテナ船やトラック及び鉄道等を組み合わせた複合一貫輸送を行うことにより、ドアトゥドアで液体物流サービスを提供できることにあります。その経済性、利便性、安全性及び、環境にも優しい輸送容器であることが評価され、欧州に始まり米州及びアジアの諸地域において広く普及しております。近年国内輸送においても、安全かつ高品質に繰り返し長期間使用できるほか、容器自身の廃棄が発生せず、残液も所定の施設で厳格に処理され環境にも優しいことが広く認知されてきており、ケミカルタンカー、タンクローリー車、JIS規格の様々な形態の輸送容器、及びドラム缶等に代わる新しい液体輸送容器として、タンクコンテナの利用が増加しており、当社グループが提供するサービスへのニーズが着実に高まっております。

タンクコンテナが「異なる化学品等の液体貨物を繰り返し輸送」しながら、常に「高品質な液体輸送サービスの提供」をしていくためには、一度利用されたタンクコンテナに、適切な内部洗浄とメンテナンスを施す必要があります。加えて、その後の厳しい内部検査と気密試験及び、定期的な法定検査を実施する等、タンクコンテナ自体の高い品質管理が継続的に要求されます。当社グループは、このような洗浄、気密検査等を行うタンクコンテナの洗浄メンテナンス拠点である「デポ」を、国内に5ヶ所(京浜支店(神奈川)、徳山支店(山口)、神戸支店(兵庫)、中部支店(三重)及び新潟出張所)、海外に1ヶ所(マレーシア現地法人)独自に展開し、高品質のタンクコンテナと内外無差別の液体物流サービスを迅速に提供できる体制を構築しております。使用済みのタンクコンテナ内部の洗浄は、積荷である化学品や食品の種類に応じて適切に行う必要がありますが、当社グループが主要な輸送地域において独自の「デポ」を展開していることは、第三者が運営するデポに洗浄を依頼している他社と比較した場合、品質管理をしていく上で大きな強みであると自負しております。また、当社グループで運営している「デポ」は、タンクコンテナの洗浄メンテナンス拠点としての役割のみならず、積荷の一時保管や加温、別容器への積み替えといった液体物流に付随するサービスを提供する物流拠点としても機能しており、これら多彩なロジスティクス・ソリューションを取引先のニーズに沿って組み合わせる上でご提案することにより、総合的な液体物流サービスのプロバイダーとして取引先から確かな信頼を頂いていると考えております。

(注) 積荷地から積卸地までの片道を貸出期間とするタンクコンテナの短期リース取引。従来のドラム缶等の容器を利用した場合、輸送容器が保管場所から積荷地に出庫されて元の保管場所に返却されるまでが貸出期間となります。

当社グループの事業系統図は、次のとおりであります。



各矢印が表す取引は、以下のとおりであります。

- ① 液体貨物の国際複合一貫輸送の請け負い、及び付随するタンクコンテナの賃貸
- ② タンクコンテナの洗浄サービス、修理、及び輸送に付随した液体貨物の保管、加温、別容器（タンクローリー車、ドラム缶等）への積み替えサービス
- ③ 当社に対するタンクコンテナの賃貸
- ④ 実輸送、通関手続、タンクコンテナの洗浄・修理等の当社への役務提供

### 3. 経営方針

#### (1) 会社の経営の基本方針

当社は、経営理念として以下の4つを掲げております。

- ① 私たちは、効率的な国際液体物流システムを構築・運営することにより、世界中のお客様に貢献します。
- ② 私たちは、きめ細かい高品質なサービスをお客様に提供します。
- ③ 私たちは、働く厳しさと喜びを共有し、国際液体物流のプロフェッショナル集団となることを目指します。
- ④ 私たちは、公共性・信頼性・国際性を備え、社会に誇り得る会社となることを目指します。

#### (2) 目標とする経営指標

当社グループは、売上高、売上総利益、営業利益及び経常利益の額を目標数値として管理しております。また、収益性の指標として、売上総利益率、売上高営業利益率等を、また経営安定の観点から、自己資本比率等を重要な指標として位置付けております。

#### (3) 中長期的な会社の経営戦略

当社グループは、企業集団として向こう3年間の中期経営計画を策定しております。この計画は当社グループの経営の基本方針を基に、経済情勢、業界動向等の経営環境を考慮し、今後の経営課題を明らかにした上で、達成すべき売上・利益を策定したものであり、各連結会計年度ごとに作成・実施される年度予算の基となるものであります。計画の内容については、毎年度の下半期終了時に、翌連結会計年度の予算編成の前に当連結会計年度の実績（予想）を踏まえ、見直し・修正を行うローリング方式を採用しております。その内容は基本方針、売上計画、設備投資計画、営業戦略、業務戦略、内部管理体制整備計画及び人員計画等で構成されております。なお、現在策定している中期経営計画の基本方針は、以下のとおりであります。

- ① 計画期間中（平成26年度～平成28年度）に総運用コンテナ数を増量し、北米地域を始めとしてグローバルネットワークのさらなる拡充を図る
- ② 国内営業拠点及び自社タンクコンテナ洗浄拠点の充実を図り、これら国内拠点を基軸とした国内ワンウェイ輸送サービスの積極推進により、国内輸送取扱量の増加を図る
- ③ 人材育成、サービス品質や技術力の向上を図り、財務力やブランドの強化を図りつつ、内外無差別でよりグローバルな事業展開を支えるより強固な経営基盤作りを推進する

#### (4) 会社の対処すべき課題

当社は、液体の大量輸送を可能とするISO標準規格のタンクコンテナを長期に亘り繰り返し利用することにより国内外において環境に優しい液体輸送サービスを提供している企業であります。従って、事故防止と環境保全が永遠の課題であり、当社の業容拡大の最も重要な生命線であると認識しております。

また、タンクコンテナによる物流は海外では広く利用されているものの、国内においては拡大途上にあります。当社は、タンクコンテナの日本におけるパイオニア企業として顧客を啓蒙しつつ、液体輸送に関わる様々なニーズへも対応し、事業の拡大を図っていきたいと考えており、そのために必要な資金を確保していく体制を維持し強化していくことが課題であると認識しております。

##### ① 安全と環境問題への取り組み

当社が取り扱う液体化学品は、流失事故等により生命や環境に悪影響を及ぼすリスクが比較的高いものであることから、当社の物流洗浄拠点における安全なタンクオペレーションや設備の充実及び安全な輸送への取り組み、そして人材教育が重要であります。このため、当社の従業員や関係する輸送業者に対し、常日頃から安全や環境問題に係わる教育や化学品自体に関する知識の十分な習得等を徹底することで、安全や環境保全体制の確保に努めており、今後も、安全と環境保全により一層重点を置いた業務体制の強化と設備の充実に心掛けていく所存であります。

## ② 顧客への啓蒙とニーズへの対応

タンクコンテナは、液体の輸送手段として既に欧米を中心に世界中で広く利用されております。当社は、このタンクコンテナを利用して、貿易取引に伴う輸送を中心とした営業活動を行って参りました。しかしながら、リーマンショック並びに東日本大震災発生以来、経営の安定を視野に入れて、日本発着の国際輸送取引に囚われず新たな収益の柱を構築すべく、近時は特に、国内輸送案件の受注拡大に向けた積極的な営業活動や欧米大手化学企業への更なる取引深化、日本を経由しない第三国間の輸送取引獲得に向けた営業強化に注力しております。なお、国内営業においては、2月に中部支店・中部営業所の開設、9月に神戸支店の敷地拡張など、継続的に国内各地に順次営業拠点を新設・拡充することによって、国内ワンウェイ輸送による低コストでの輸送サービスや、液体貨物の積み替え・加温等の付帯サービスの提供力を強化することで、タンクコンテナの優位性と当社の持つ専門性をアピールしつつ、顧客の物流ニーズに応えるご提案を行っていきたくと考えております。

## ③ 能力拡大及び省力化への取り組み

顧客のニーズの増加と多様化に充分に対処するために、支店等の物流洗浄拠点の設備能力の増強や、当社の業務を効率的に処理するためのコンピュータシステム等の高度化が、当社の更なる業績の発展にとって継続して対処すべき課題であると認識しております。

## ④ 資金調達と投資行動

これまで銀行等からの資金調達のほか、リースやレンタル方式を中心としてタンクコンテナを調達しておりますが、今後は運用するタンクコンテナ数の増加、及び支店等物流洗浄拠点の設備能力増強ニーズに応じ、旺盛な設備投資に充分応じられるよう、資本市場からの資金調達も視野に入れた財務運営を行っていきたくと考えております。

なお、設備投資にあたっては、投資の有効性や採算性、及び液体物流市場や顧客の動向と将来を見据えて慎重かつ充分に吟味したうえで、機動的にタンクコンテナを調達し、また、物流洗浄拠点等の増強をしていきたくと考えております。

## ⑤ 財務力の充実

当社は成長途上にあり、業容の拡大にあわせて財務内容も着実に改善していきたくと考えております。他方、今後も業容の拡大と競争力を一層向上していくためにはタンクコンテナの調達や物流洗浄拠点への継続的な投資が不可欠なものであります。従いまして、投資資金の回収が長期に亘るなか、業容の拡大と財務力の充実のバランスを保った経営が肝要であると考えております。

## 4. 連結財務諸表

## (1) 連結貸借対照表

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成24年12月31日)	当連結会計年度 (平成25年12月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	1,693,611	2,068,209
売掛金	787,194	1,015,912
貯蔵品	9,635	11,357
繰延税金資産	35,187	53,013
その他	73,565	324,525
貸倒引当金	△573	△1,451
流動資産合計	2,598,620	3,471,566
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	542,930	737,139
機械装置及び運搬具（純額）	193,106	247,424
工具、器具及び備品（純額）	29,967	31,147
タンクコンテナ（純額）	7,488,661	7,372,333
土地	1,568,801	1,568,801
建設仮勘定	41,700	—
有形固定資産合計	9,865,167	9,956,845
無形固定資産	88,887	98,017
投資その他の資産	125,614	115,495
固定資産合計	10,079,669	10,170,358
繰延資産		
社債発行費	18,530	9,521
繰延資産合計	18,530	9,521
資産合計	12,696,820	13,651,446
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	505,772	636,196
短期借入金	63,000	70,000
1年内返済予定の長期借入金	1,178,625	1,378,989
1年内償還予定の社債	344,400	324,600
リース債務	100,670	109,926
未払法人税等	284,027	570,101
繰延税金負債	2,697	3,974
賞与引当金	18,266	20,504
デリバティブ債務	115,164	—
その他	176,429	289,095
流動負債合計	2,789,053	3,403,389

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成24年12月31日)	当連結会計年度 (平成25年12月31日)
<b>固定負債</b>		
社債	554,600	230,000
長期借入金	5,066,250	4,744,305
リース債務	659,013	594,305
繰延税金負債	115,247	84,459
退職給付引当金	56,404	64,951
デリバティブ債務	246,638	8,502
その他	47,821	150,456
<b>固定負債合計</b>	<b>6,745,977</b>	<b>5,876,981</b>
<b>負債合計</b>	<b>9,535,030</b>	<b>9,280,370</b>
<b>純資産の部</b>		
<b>株主資本</b>		
資本金	600,440	600,440
資本剰余金	526,599	526,599
利益剰余金	2,088,180	3,179,838
自己株式	—	△62
<b>株主資本合計</b>	<b>3,215,220</b>	<b>4,306,815</b>
<b>その他の包括利益累計額</b>		
その他有価証券評価差額金	△1,290	△795
繰延ヘッジ損益	△24	—
為替換算調整勘定	△52,115	65,055
<b>その他の包括利益累計額合計</b>	<b>△53,430</b>	<b>64,260</b>
<b>純資産合計</b>	<b>3,161,789</b>	<b>4,371,076</b>
<b>負債純資産合計</b>	<b>12,696,820</b>	<b>13,651,446</b>

## (2) 連結損益計算書及び連結包括利益計算書

## 連結損益計算書

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)
売上高	7,331,486	9,113,289
売上原価	5,296,089	6,294,426
売上総利益	2,035,396	2,818,863
販売費及び一般管理費	1,022,959	1,133,760
営業利益	1,012,437	1,685,103
営業外収益		
受取利息	1,841	2,573
為替差益	—	192,930
デリバティブ評価益	500,940	370,579
受取家賃	2,630	4,264
受取保険金	1,222	46,361
受取補償金	2,359	4,209
その他	1,891	3,064
営業外収益合計	510,886	623,982
営業外費用		
支払利息	238,759	224,471
社債発行費償却	9,302	9,009
株式交付費	5,716	—
株式公開費用	10,136	—
為替差損	127,330	—
その他	13,376	27,569
営業外費用合計	404,621	261,051
経常利益	1,118,701	2,048,034
特別利益		
固定資産売却益	5,048	714
特別利益合計	5,048	714
特別損失		
固定資産売却損	—	527
固定資産除却損	4,956	25,019
減損損失	—	10,547
訴訟和解金	—	14,800
会員権売却損	—	5,278
特別損失合計	4,956	56,172
税金等調整前当期純利益	1,118,793	1,992,577
法人税、住民税及び事業税	473,375	818,082
法人税等調整額	△16,209	△48,142
法人税等合計	457,166	769,939
少数株主損益調整前当期純利益	661,627	1,222,637
当期純利益	661,627	1,222,637

## 連結包括利益計算書

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)
少数株主損益調整前当期純利益	661,627	1,222,637
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	280	494
繰延ヘッジ損益	△2,808	24
為替換算調整勘定	55,026	117,171
その他の包括利益合計	52,499	117,691
包括利益	714,126	1,340,328
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	714,126	1,340,328
少数株主に係る包括利益	—	—



## (3) 連結株主資本等変動計算書

前連結会計年度(自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	389,300	315,459	1,465,713	—	2,170,472
当期変動額					
新株の発行	211,140	211,140			422,280
剰余金の配当			△39,160		△39,160
当期純利益			661,627		661,627
自己株式の取得				—	—
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)					—
当期変動額合計	211,140	211,140	622,467	—	1,044,747
当期末残高	600,440	526,599	2,088,180	—	3,215,220

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	為替換算調整勘定	その他の包括利益 累計額合計	
当期首残高	△1,570	2,783	△107,142	△105,930	2,064,542
当期変動額					
新株の発行					422,280
剰余金の配当					△39,160
当期純利益					661,627
自己株式の取得					—
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)	280	△2,808	55,026	52,499	52,499
当期変動額合計	280	△2,808	55,026	52,499	1,097,246
当期末残高	△1,290	△24	△52,115	△53,430	3,161,789

当連結会計年度(自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	600,440	526,599	2,088,180	—	3,215,220
当期変動額					
新株の発行	—	—			—
剰余金の配当			△130,980		△130,980
当期純利益			1,222,637		1,222,637
自己株式の取得				△62	△62
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)					—
当期変動額合計	—	—	1,091,657	△62	1,091,595
当期末残高	600,440	526,599	3,179,838	△62	4,306,815

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	為替換算調整勘定	その他の包括利益 累計額合計	
当期首残高	△1,290	△24	△52,115	△53,430	3,161,789
当期変動額					
新株の発行					—
剰余金の配当					△130,980
当期純利益					1,222,637
自己株式の取得					△62
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)	494	24	117,171	117,691	117,691
当期変動額合計	494	24	117,171	117,691	1,209,286
当期末残高	△795	—	65,055	64,260	4,371,076

## (4) 連結キャッシュ・フロー計算書

	(単位：千円)	
	前連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益	1,118,793	1,992,577
減価償却費	574,134	685,912
減損損失	—	10,547
訴訟和解金	—	14,800
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	△3,384	649
賞与引当金の増減額 (△は減少)	4,122	△143
退職給付引当金の増減額 (△は減少)	8,270	8,547
受取利息	△1,841	△2,573
支払利息	238,759	224,471
社債発行費償却	9,302	9,009
為替差損益 (△は益)	△64,939	△206,754
デリバティブ評価損益 (△は益)	△500,940	△370,579
株式交付費	5,716	—
株式公開費用	10,136	—
有形固定資産売却損益 (△は益)	—	△187
有形固定資産除却損	4,956	25,019
会員権売却損益 (△は益)	—	5,278
売上債権の増減額 (△は増加)	△54,686	△132,760
仕入債務の増減額 (△は減少)	△50,127	74,538
その他	△40,057	△120,484
小計	1,258,215	2,217,869
利息の受取額	1,535	2,654
利息の支払額	△233,894	△230,339
訴訟和解金の支払額	—	△14,800
法人税等の支払額	△532,419	△550,044
営業活動によるキャッシュ・フロー	493,436	1,425,340
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
定期預金の純増減額 (△は増加)	△201,800	354,575
有形固定資産の取得による支出	△756,672	△607,950
有形固定資産の売却による収入	7,211	4,352
無形固定資産の取得による支出	△1,525	△464
敷金及び保証金の差入による支出	△704	△13,332
敷金及び保証金の回収による収入	517	5,512
その他	25	11,441
投資活動によるキャッシュ・フロー	△952,949	△245,865

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入れによる収入	509,000	630,000
短期借入金の返済による支出	△462,400	△623,000
長期借入れによる収入	1,334,000	1,200,000
長期借入金の返済による支出	△1,212,193	△1,322,439
社債の発行による収入	295,475	—
社債の償還による支出	△364,400	△344,400
株式の発行による収入	416,563	—
株式の発行による支出	△10,136	—
リース債務の返済による支出	△57,245	△104,538
配当金の支払額	△39,160	△130,980
その他	△7,666	△22,188
財務活動によるキャッシュ・フロー	401,836	△717,547
現金及び現金同等物に係る換算差額	63,454	195,785
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	5,778	657,713
現金及び現金同等物の期首残高	1,293,123	1,298,902
現金及び現金同等物の期末残高	1,298,902	1,956,615

(5) 連結財務諸表に関する注記事項

(継続企業の前提に関する注記)

該当事項はありません。

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

子会社は、すべて連結しております。

連結子会社の数 6社

連結子会社の名称

NIPPON CONCEPT SINGAPORE PTE. LTD.

NIPPON CONCEPT MALAYSIA SDN. BHD.

EURO-CONCEPT B. V.

NICHICON EUROPE B. V.

NICHICON UK LIMITED.

NIPPON CONCEPT AMERICA, LLC.

2. 持分法の適用に関する事項

該当事項はありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

すべての連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4. 会計処理基準に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

その他有価証券

時価のないもの

移動平均法による原価法

② デリバティブ取引により生じる債権及び債務

時価法

③ たな卸資産

貯蔵品

消耗品等：最終仕入原価法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）

タンクコンテナ（貯蔵品）：個別法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産(リース資産を除く)

建物及び構築物(建物附属設備を除く)、工具、器具及び備品、タンクコンテナは定額法、それ以外については定率法によっております。

なお、主な耐用年数は次のとおりです。

建物及び構築物 : 5～50年

機械装置及び運搬具 : 2～17年

工具、器具及び備品 : 2～20年

タンクコンテナ : 4～20年

② 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法によっております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。

③ リース資産

所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零(残価保証の取決めがある場合は残価保証額)とする定額法を採用しております。

なお、所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年12月31日以前のリース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

(3) 重要な繰延資産の処理方法

社債発行費

社債の償還までの期間にわたり定額法により償却しております。

(4) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

② 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与支出に充てるため、支給見込額に基づき当連結会計年度に見合う分を計上しております。

③ 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における自己都合要支給額を計上しております。

なお、退職給付債務の計算方法については、簡便法によっております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

売上のうち海上輸送を伴う売上は、入港日を計上基準としております。

なお、アジア域内及び欧州域内の輸送については渡航日数が短期間であることを鑑み、出港日を計上基準としております。

(6) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

なお、在外子会社等の資産及び負債は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めております。

(7) 重要なヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理を採用しております。

なお、会計上の要件を満たす金利スワップ取引については、特例処理を採用しております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

(ヘッジ手段) (ヘッジ対象)

金利スワップ 借入金の利息

③ ヘッジ方針

社内規程に基づき、借入金の金利変動リスクを回避する目的で金利スワップ取引を行っております。

④ ヘッジ有効性評価の方法

金利スワップについては、特例処理を採用しているため、有効性の評価を省略しております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、要求払預金及び取得日から3ヶ月以内に満期日の到来する流動性の高い、容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない短期的な投資であります。

(9) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

なお、控除対象外消費税等については、期間費用として処理しております。

(会計方針の変更)

(会計上の見積りの変更と区別することが困難な会計方針の変更)

当社は、法人税法の改正に伴い、当連結会計年度より、平成25年1月1日以後に取得した有形固定資産については、改正後の法人税法に基づく減価償却の方法に変更しております。

なお、これによる当連結会計年度の営業利益、経常利益及び税金等調整前当期純利益に与える影響は軽微であります。

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

通貨関連

前連結会計年度(平成24年12月31日)

(単位：千円)

	種 類	契約額等	契約額等のうち 1年超	時 価	評価損益
市場取引 以外の取引	通貨オプション取引 売建 米ドル	2,445,489	1,615,041	△369,939	△369,939
	買建 米ドル	1,474,947	968,013	8,176	8,176
	合 計	3,920,436	2,583,054	△361,763	△361,763

(注) 1 時価は、取引金融機関から提示された価格等に基づき算定しております。

2 通貨オプション取引については、売建・買建オプション料を相殺するゼロコストオプション取引であるため、オプション料は発生しておりません。

当連結会計年度(平成25年12月31日)

(単位：千円)

	種 類	契約額等	契約額等のうち 1年超	時 価	評価損益
市場取引 以外の取引	通貨オプション取引 売建 米ドル	1,615,041	784,593	△39,141	△39,141
	買建 米ドル	968,013	461,079	47,957	47,957
	合 計	2,583,054	1,245,672	8,815	8,815

(注) 1 時価は、取引金融機関から提示された価格に基づき算定しております。

2 通貨オプション取引については、売建・買建オプション料を相殺するゼロコストオプション取引であるため、オプション料は発生しておりません。

## 2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

## (1) 通貨関連

前連結会計年度(平成24年12月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(平成25年12月31日)

該当事項はありません。

## (2) 金利関連

前連結会計年度(平成24年12月31日)

(単位：千円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額	契約額のうち1年超	時価
原則的処理方法	金利スワップ取引 受取変動・ 支払固定	長期借入金	10,200	—	△40
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 受取変動・ 支払固定	長期借入金	5,042,635	4,192,375	(注) 2
合 計			5,052,835	4,192,375	△40

(注) 1 時価は、取引金融機関から提示された価格等に基づき算定しております。

2 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(平成25年12月31日)

(単位：千円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額	契約額のうち1年超	時価
原則的処理方法	金利スワップ取引 受取変動・ 支払固定	長期借入金	—	—	—
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 受取変動・ 支払固定	長期借入金	4,735,175	3,766,115	(注) 2
合 計			4,735,175	3,766,115	—

(注) 1 時価は、取引金融機関から提示された価格等に基づき算定しております。

2 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

## (セグメント情報等)

## (セグメント情報)

当社グループの事業は、タンクコンテナを使用した国際複合一貫輸送及び付帯業務の単一事業であるため、記載を省略しております。

## (関連情報)

前連結会計年度(自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)

## 1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品、サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。



## 2. 地域ごとの情報

## (1) 売上高

(単位：千円)

日本	アジア		欧州	その他	合計
		うちシンガポール			
4,130,767	2,038,086	860,282	1,079,436	83,196	7,331,486

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

## (2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

## 3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
Infineum International Ltd.	927,175	国際複合一貫輸送事業

(注) 売上高は、同一の企業集団に属する顧客への売上高を集約して記載しております。

当連結会計年度(自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)

## 1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品、サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

## 2. 地域ごとの情報

## (1) 売上高

(単位：千円)

日本	アジア		欧州	その他	合計
		うちシンガポール			
5,191,370	2,447,948	1,065,522	1,185,738	288,232	9,113,289

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

## (2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

## 3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
Infineum International Ltd.	1,082,260	国際複合一貫輸送事業

(注) 売上高は、同一の企業集団に属する顧客への売上高を集約して記載しております。

(報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報)

該当事項はありません。

(報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報)

該当事項はありません。

(報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報)

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

前連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)		当連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	
1株当たり純資産額	724.18円	1株当たり純資産額	1,001.17円
1株当たり当期純利益金額	164.36円	1株当たり当期純利益金額	280.04円

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2 当社は平成24年6月19日付で普通株式1株につき1,000株の割合で株式分割を行いました。前連結会計年度の期首に当該株式分割が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額を算定しております。

3 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (平成24年12月31日)	当連結会計年度 (平成25年12月31日)
連結貸借対照表の純資産の部の合計額(千円)	3,161,789	4,371,076
普通株式に係る純資産額(千円)	3,161,789	4,371,076
普通株式の発行済株式数(株)	4,366,000	4,366,000
普通株式の自己株式数(株)	—	30
1株当たり純資産額の算定に用いられた普通株式の数(株)	4,366,000	4,365,970

4 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (平成24年12月31日)	当連結会計年度 (平成25年12月31日)
連結損益計算書上の当期純利益(千円)	661,627	1,222,637
普通株式に係る当期純利益(千円)	661,627	1,222,637
普通株主に帰属しない金額(千円)	—	—
普通株式の期中平均株式数(株)	4,025,426	4,365,993

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

## 5. その他

## (1) 生産、受注及び販売の状況

## (1) 生産実績

該当事項はありません。

## (2) 受注実績

該当事項はありません。

## (3) 仕入実績

仕入内容は、主に海上及び陸上運送費用、作業料、倉庫料などの外注費であります。仕入金額は、連結損益計算書の売上原価に相当する金額であります。

当連結会計年度における仕入実績は次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	
	金額(千円)	前年同期比(%)
国際複合一貫輸送事業	6,294,426	118.9
合 計	6,294,426	118.9

(注) 1 当社及び連結子会社の事業は、タンクコンテナを使用した国際複合一貫輸送及び付帯業務の単一事業であります。

2 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

## (4) 販売実績

当連結会計年度における輸送形態別の販売実績は次のとおりであります。

輸送形態別	当連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	
	金額(千円)	前年同期比(%)
輸 出 売 上	3,551,975	132.8
輸 入 売 上	3,474,814	138.6
三 国 間 売 上	753,163	76.0
国内輸送等売上	1,084,664	107.3
そ の 他	248,670	171.1
合 計	9,113,289	124.3

(注) 1 「輸出売上」「輸入売上」「三国間売上」「国内輸送等売上」「その他」は、輸送経路による区分であります。

2 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	
	金額(千円)	前年同期比(%)
国際複合一貫輸送事業	9,113,289	124.3
合 計	9,113,289	124.3

(注) 1 当社及び連結子会社の事業は、タンクコンテナを使用した国際複合一貫輸送及び付帯業務の単一事業であります。

2 最近2連結会計年度の主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は次の通りであります。相手先別の売上高は、同一の企業集団に属する顧客への売上高を集約して記載しております。

相手先	前連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)		当連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	
	販売高(千円)	割合(%)	販売高(千円)	割合(%)
Infineum International Ltd.	927,175	12.6	1,082,260	11.9

3 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。